

# 2018 福祉教育・ボランティア学習のつどい in あいち・なごや

～ 共生文化創造への途～

## 【報告書】



2018年2月10日(土) 13:00～17:00

日本福祉大学 東海キャンパス

- 主催 日本福祉教育・ボランティア学習学会 中部ブロック  
社会福祉法人 愛知県社会福祉協議会  
社会福祉法人 名古屋市社会福祉協議会
- 共催 あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会
- 後援 日本福祉大学  
愛知県、愛知県教育委員会  
名古屋市、名古屋市教育委員会  
東海市、東海市教育委員会



## はじめに

2018年2月10日(土)、愛知県内外から関係者含め263名の方にご参加いただき、愛知県社会福祉協議会、名古屋市社会福祉協議会、日本福祉教育・ボランティア学習学会中部ブロックの三者共催のもと「2018福祉教育・ボランティア学習のつどい in あいち・なごや」を日本福祉大学東海キャンパスにて開催しました。

地域共生社会の実現にむけて、様々な取り組みが始まっています。とはいえ、「共生社会」をつくるのは難しいことです。地域社会には、「優しい顔」と「冷たい顔」があります。身近な地域であればあるほど、共に生きるということは理想でもあり、一方で難しい現実も多々あります。とはいえ、私たちはそのことを、「理想だから」で終わらせずに、どうしたら一步でも近づくことができるか、真剣に考えて行動を起こさない限り、実現はできません。そのときに大切にしたいことが、「ネットワーク」です。一人が頑張るのではなく、みんなで頑張る。そのことで共生する楽しさが生まれます。そのときの感動や勇気が共生の文化を育む礎になります。

2009年、私たちは日本福祉教育・ボランティア学習学会を、ここ愛知で開催しました。そのときのテーマが、「共生文化創造への途」でした。私たちは共生を、「文化」にまで高めなければ定着しないと考えていました。あれから9年が経過し、2018年11月に再び、愛知で第24回大会が開催されます。今回のつどいは、大会本番にむけたプレイベントとして位置づけています。県内の多くの関係者が集い、11月にむけた発信をできたつどいとなりました。

「福祉教育・ボランティア学習」は、福祉、教育、ボランティア、学習が、様々に織りなしい、多様な可能性を生み出します。ぜひこのつどいを通して、多くの皆さんと一緒に共生文化の創造にむけて一步を踏み出しましょう。

2018年4月

2018福祉教育・ボランティア学習のつどい実行委員会

## もくじ

プログラム概要	3
全体会 「地域と共にはぐくむ共生文化の創造 ～「みんなの楽校」の実践事例に学ぶ～」	6
分科会① 「ボランティアを通じた共生文化創造に向けて ～ボランティアの本質を深める～」	18
分科会② 「当事者講師と共につくる福祉教育プログラム」	22
分科会③ 「学校・社協・地域がつながる福祉教育 ～「ともに生きる力を育む」学びの実践から～」	28
分科会④ 『「地域包括ケア」の推進プロセスにおける学び合い』	34
参考資料 「開催要項」	42
メッセージ「2018福祉教育・ボランティア学習のつどい in あいち・なごや 実行委員会からメッセージ」	44

# プログラム

## 開 会

午後 1 時～午後 1 時 15 分

開会・オリエンテーション

開会あいさつ / 原田 正樹(日本福祉教育・ボランティア学習学会会長)

## 鼎 談

午後 1 時 15 分～午後 2 時 45 分

地域と共にはぐくむ共生文化の創造 ～「みんなの学校」の実践事例に学ぶ～

地域共生社会の実現にむけて、様々な取り組みが始まっています。一方、学校での福祉教育は広がりを見せていないのが現状です。これでは子ども達が地域の優しさや難しさを捉える事、共生社会を生きてゆく自分自身の未来について考える事にはつながらないように思います。私たちは地域の仲間である子どもたちと一緒に、どのような未来を創造していくのでしょうか。

春日井市立藤山台中学校では、「みんなの楽校」を合言葉に中学生が地域で活動しています。そんな活動を教育的に見守る教員（学校）、住民（地域）の暖かさ。子ども達もたらす地域への愛着。私たちはこの学校と地域の営みから、共生する楽しさや、共生の文化が育まれる途を学びたいと思います。

### 【登壇者等】

#### 〈登壇者〉

伊藤 孝之(いとう たかゆき)さん（春日井市立藤山台中学校校長）

阿部 國枝(あべ くにえ)さん（藤山台地区社会福祉協議会会長）

#### 〈進 行〉

野尻 紀恵(のじり きえ)さん（日本福祉大学／日本福祉教育・ボランティア学習学会理事）

## 【第 1 分科会】（企画：名古屋市社会福祉協議会）

ボランティアを通じた共生文化創造に向けて ～ボランティアの本質を深める～

今日のボランティア活動は福祉分野のみならず様々な分野、多様な担い手に広がり、他者のための活動にとどまることなく、自らの地域づくりにもつながる活動となっています。その一方で、安易なボランティアの活用など、ボランティアの捉え方が一部で変化している状況もあります。

そこで、本分科会では愛知県内のボランティア実践者やその活動を支援する社協のこれまでの実践の歩みや課題から、今一度ボランティアの役割や共生文化の創造について、ともに考える機会にしていきたいと思います。

## 【登壇者等】

- 近藤 京子(こんどう きょうこ)さん（地域ボランティアグループかがやき代表）  
織田 元樹(おだ もとき)さん（NPO 法人ボラみみより情報局代表理事）  
中村 弘佳(なかむら ひろよし)さん（名古屋市社会福祉協議会ボランティアセンター所長）  
原田 正樹(はらだ まさき)さん（日本福祉大学／日本福祉教育・ボランティア学習学会会長）

## 【第 2 分科会】（企画：愛知県社会福祉協議会）

当事者講師と共につくる福祉教育プログラム

福祉教育においては、子どもや大人、学校や地域等の対象やフィールドに関係なく、プログラムづくりの段階から当事者と共に構築していくことが重要です。

しかし、普段から当事者参加の意義の確認やプログラム実施後のふりかえりや評価を丁寧に行っているでしょうか。

そこで本分科会では、福祉教育プログラムを当事者や当事者と関わる団体等に評価していただき、その視点を今後の福祉教育プログラムにどう活かしていけばよいのか参加者とともに考えます。

## 【登壇者等】

- 白石 清子(しらいし きよこ)さん(特定非営利活動法人愛知県難聴・中途失聴者協会)  
山田 弘(やまだ ひろし)さん(アンサンブル・アミー事務局長)  
清水 将一(しみず まさかず)さん(東海学院大学講師)  
三好 宏和(みよし ひろかず)さん (A J U 自立の家 わだちコンピュータハウス)

### 【第3分科会】(企画：学会中部ブロック)

#### 学校・社協・地域がつながる福祉教育～「ともに生きる力を育む」学びの実践から～

子ども達が「ともに生きる力を育む」ためには、学校と地域がつながり、どのように福祉教育に取り組むかがカギとなります。地域の多様な方々との出会いや関わりを通じた学びの機会を作るためには、学校だけでなく地域とつながりがある社会福祉協議会と協働することで、より豊かな学びへと高まります。

本分科会では、学校・社協・地域が協働した小学校と高校の実践事例とディスカッション等を通して、「つながる意義」や「つながるために必要なこと」を共有し、「ともに生きる力を育む」福祉教育の展開について参加者とともに考えます。

#### 【登壇者等】

森 冬起(もり ふゆき)さん (岩倉市立岩倉南小学校教諭)

石井 太一(いしい たいち)さん (岩倉市社会福祉協議会職員)

佐々木 早苗(ささき さなえ)さん (愛知県立古知野高校生活文化科教諭)

小林 洋司(こばやし ようじ)さん (日本福祉大学/日本福祉教育・ボランティア学習学会特任理事)

### 【第4分科会】(企画：学会中部ブロック)

#### 「地域包括ケア」の推進プロセスにおける学び合い

困りごとを抱えた人を地域全体で支える「地域包括ケア」を進めるためには、住み続けたいと思う地域の姿を地域住民と行政、医療・福祉・介護専門職、NPO、教育機関等が共有し、地域の課題に基づいて支援のための仕組み・サービスを、協働・多職種連携で作りだしていくことが重要であると言われていきます。

本分科会では、知多半島で「0～100歳の地域包括ケア = 支え合うコミュニティづくり」をめざして、人づくりに取り組むNPO法人地域福祉サポートちたの事例を中心に紹介します。支え合うコミュニティづくりを進めるための協議や学びの場づくりとそこでの想いの共有を通じて、地域住民や多様な分野の専門職の意識や行動がいかに変化したのかに注目して、学び合いについて参加者とともに考えます。

#### 【登壇者等】

市野 恵(いちの めぐみ)さん (特定非営利活動法人地域福祉サポートちた代表理事)

山崎 紀恵子(やまざき きえこ)さん (認定特定非営利活動法人絆代表理事)

杉浦 政代(すぎうら まさよ)さん (ボランティアグループ チームにじ代表)

末永 和也(すえなが かずや)さん (日本福祉大学/日本福祉教育・ボランティア学習学会)

## 全体会

### 地域と共にはぐくむ共生文化の創造 ～「みんなの楽校」の実践事例に学ぶ～



・全体会（午後 1 時 1 5 分～ 2 時 4 5 分）

## 地域と共にはぐくむ共生文化の創造 ～「みんなの楽校」の実践事例に学ぶ～

### 1. 趣旨・概要

地域共生社会の実現にむけて、様々な取り組みが始まっています。一方、学校での福祉教育は広がりを見せていないのが現状です。これでは子ども達が地域の優しさや難しさを捉える事、共生社会を生きてゆく自分自身の未来について考える事にはつながらないように思います。私たちは地域の仲間である子どもたちと一緒に、どのような未来を創造していくのでしょうか。

春日井市立藤山台中学校では、「みんなの楽校」を合言葉に中学生が地域で活動しています。そんな活動を教育的に見守る教員（学校）、住民（地域）の暖かさ。子ども達がもたらす地域への愛着。私たちはこの学校と地域の営みから、共生する楽しさや、共生の文化が育まれる途を学びたいと思います。

登壇者 伊藤 孝之 さん

（春日井市立藤山台中学校校長）

愛知県出身。愛知教育大学卒業後、春日井市内の小学校に勤務。途中3年間、春日井市の文化財関連の部署に出向。市内の小学校と中学校で校長を務めた後、市教委に4年間出向し、学校規模適正化事業「藤山台中学校区3小学校統合」に携わり、学校と地域の連携を推進。

現在、春日井市小中学校長会の会長。38年間の教員生活の中で唯一の自慢は、小学校1年から中学校3年まで義務教育すべての学年の担任を経験したこと。

登壇者 阿部 國枝 さん

（藤山台地区社会福祉協議会会長）

福井県出身。愛知県の保育短大を卒業後31年間私立幼稚園に勤務。その間に結婚し、藤山台に住居を構え、2人の子育てをしながら働く。

幼稚園退職後、藤山台地区社協の子育てサロンと子育て支援のボランティアグループを立ち上げる。藤山台中学校区学校地域連携協議会の地域コーディネーターとして、小学校内に設置された地域連携室で活動。小学生向けのイベント「土曜チャレンジアップ教室」や地域交流イベント「三世代ふれあいコンサート」などの企画、運営を担当。

進行者 野尻 紀恵 さん

（日本福祉大学／日本福祉教育・ボランティア学習学会理事）

日本福祉大学社会福祉学部准教授。社会福祉学部スクールソーシャルワーク教育課程長。

日本福祉教育・ボランティア学習学会理事（ネットワーク担当）。神戸大学教育学部卒業後、神戸市内の高等学校で教員となる。地域と学校が協働する福祉教育を実践。阪神淡路大震災被災後、神戸市長田区のまちづくり、人育てに取組み、福祉教育にはまる。福祉の道に進むため大学院に進み現在に至る。

主著に『スクールソーシャルワーカー実務テキスト』（共著／学事出版）『子どもの貧困ハンドブック』（共著／かがわ出版）等。

## 2. タイムテーブル

時間	内容
13:15~13:20	【主旨説明】
13:20~14:10	【鼎談】 伊藤 孝之さん（春日井市立藤山台中学校校長） 阿部 國枝さん（藤山台地区社会福祉協議会 会長） 野尻 紀恵さん （日本福祉大学／日本福祉教育・ボランティア学習学会理事）
14:10~14:30	【インタビュー映像】 「春日井市藤山台中学校生徒会長へのインタビュー」
14:30~14:45	【まとめ】

## 3. 内容

### 〇はじめに

#### 野尻

みなさん、こんにちは。今回、藤山台中学校地区のお話をさせていただこうと、お二人をお招きしました。今回のテーマは「地域と共に育む共生文化の創造 ～みんなの楽校の実践事例に学ぶ～」です。この楽校の「楽」という字がポイントで、楽校の「楽」の字が「楽しい」の文字になっています。「みんなの楽校」のジャンパーを作っていて、これを着てボランティア活動をしている子ども達があります。その子ども達の実践事例に学びたいなということでお招きいたしました。

先ほど原田会長からもお話があり、「共に生きる社会をつくっていく。そこを文化にしていかなければならないのではないかな？文化になれば共生社会というものをつくられないのではないかな」ということがありました。この文化をつくっていくのは私達一人ひとりだと思うのです。その私達一人ひとりの人の中でも、特に未来をつくっていく子ども達に、私達がどんなことを伝え、どんなことを一緒に学びあっていくのかが、とても重要になってくるのではないかなという風に思います。

藤山台中学校は春日井市にございまして、この春日井市立藤山台中学校では「みんなの楽校」を合言葉に中学生がほんとにたくさん地域活動をしています。そんな活動を教育的な視点で見守る、教員、学校の先生方、そして、地域住民のみなさんの暖かさを感じました。子ども達が、そのことでやはり地域に愛着を持っていることも感じられます。この姿から、ぜひ、これから共生の文化を育むためのヒントをいただきたいなと思って、そんな意図で今日お二人をお呼びしました。

今日私、伊藤さんって言うのはちょっと気恥しいんです。出合いは、何年前でしたっけ？ 六年前ですね。私はスクールソーシャルワーカーを養成しているのですが、「スクールソーシャルワーカーを春日井でも入れたいのだけどどうしたらいい」みたいな感じで日本福祉大の美浜キャンパスに来てくださったんです。その時、勢いのある、何でもありな先生だな、という印象があって。中学校校長をされてからも非常に積極的に何でもされているな、という感じがします。

今からの進行は、伊藤さんにまず取り組みについてお話をさせていただいて、そして、地域の藤山台地区社協会長の阿部さんから、それを地域から眺めた時にどんな風に映っていたのか、そして一緒に取り組まれて、地域住民もどう変容していったのかについて

お話をさせていただこうと思っています。では、伊藤さんお願いします。

## ○「みんなの楽校」

伊藤

はい、宜しくお願いいたします。

最初に、「みんなの楽校」という言葉について、勝手に自分がつくった言葉なのですが、その簡単な説明だけさせてください。

まず、「みんな」というのは取ってつけた言葉ではなくて、ここがすごく自分にとっては重要なポイントでした。当然学校なので、主役は子どもで、生徒ですけれども、子どもだけが楽しければいいものではない。みんなの楽校であるということで、みんなってというのは、主役の子どもは当然ですが、自分が力を入れたのは、主役に遜色ない立場である職員です。教員を含めた職員が、その学校で生き生きとしなければ意味がない。子どもの後ろにいる保護者が、安心して信用して、この学校なら大丈夫だろうと思って行かせるような学校にしたい。

そしてそれだけでは駄目で、やっぱり地域です。地域に認められるような学校、古い言葉でいうと「おらが学校」というような、そんな感覚の学校に出来ないかなと思ったわけです。

色々な問題があって学校が門を閉じるようになり、不審者対応だとかいろいろありましたので、やむを得ないと思いつつ、その壁がどうも気になってしょうがない。人工的な壁はいいとして、心理的な壁が知らないうちに出来て、学校が特別な場所みたいな形になり、地域にあるけど地域のものでないというような感覚に陥りやすいのかなと。

自分のなかでは、この、「みんな」というところを強調して学校づくりをしようという風に思いました。みんなが楽しくやれるようなところをつくろうということ。子どもは、勉強するために来るのですが、特に中学生ぐらいになるとかなり学力の差も出てきて、授業がつまらないとか、ついていけないという子も出てくる。何でもいいからとにかく、学校に楽しみを持ってほしい。放課の遊びでもいいし、部活でもいいし、好きな女の子がいたらそれを目当てでもいいし、好きな先生がいたら話すことでもいい。給食が食べられるとか。家で食べられない子もいるかもしれないので。何でもいいから一つ楽しみをもってきてくださいというような気持ちを持って学校をつくっていかうと考えています。

その学校をつくるには、校長ひとりでは何も出来ませんので、職員の協力が必要になります。職員の意識を変えることから始めなくてはいけないなと思いました。学校としてはフルオープンでウェルカムから始めようと思いました。

生徒も保護者でも地域の人でもすべて受容する。特に生徒には共感するといったところから初めて、ラポールづくり。関係性を保とう、作ろうよということから始めてきました。

藤山台中学校には交流室があって、地域の人が使える部屋があります。休みの日でも部活があって学校は開いているので使って下さい、と、部屋が一つ作ってあり、社協の会議や防災会議などに使っております。

子どもの方にも、不登校気味の子などが入れるような部屋も作ってあって、先生方が常駐していろんな指導をできる体制を作っている。生徒指導の面で、上から目線で喋ってはダメだよということだけは言いました。寄り添うような生徒指導をしてほしいということです。いろんな格好で来る子や、遅刻してくる子などいろいろあります。そんなときに門のところで、こんな格好で入れないからねという指導ではなくて、まず「なんでそんな恰好できちゃった？今日何かあったの」というところから始めるという姿勢を

とっていこう、と。適当なことを子どもが言っても、とりあえず聴こうという雰囲気を保たないと難しいよ、という話をしました。

最初は納得しない先生もいて難しかったです。やっていくうちに子どもが変わっていくので、先生方も意識も変えていく形になってきました。いつか子どもも気づいて変えてくるだろう、ということが伝わるようになった。先生方は基本真面目なので、規則があったら守らせるという意識が強くて、一番言われたのが「周りに示しがつかない」ということです。「他の生徒がなんていう」と。他の保護者が文句言うことが実際にあった。なぜあれでいいのと言われました。

自分が思ったのは示して何？示しはつけなくてはいけないのか？それをしてしまうと排他的になってしまって、共生なんてありえなくなってしまう。そのところを粘りました。学校の規則はいろいろあります。中学生としてこれぐらいやろうと書いてありますが、きちんと出来る子は頑張っってやりましょう。社会常識に役立てられる。でも、出来ない子もいる。やりたくても出来ないのか。やらないのは別として、出来ない子がいる中でそれがすべてアウトか。いやそうではないはず。そういう子もいるよということを知る、ということが大事だと思う。

ひとりだけ髪の色が異なる子がクラスにいても、髪を染めることはいけないことだけど、出ていけという雰囲気ではなく、「別にいいのではないか、何か事情があるのだろう」という形で受け入れていくクラスを作ろう、と言いました。他の保護者に対してはそのうち直すと思います、と伝えました。その子どもだけの問題ではない。家庭環境や親の考え方もあるので、子どもだけのせいではないんです。

学校づくりを進めていく上で、恵まれていたのは、職員が若くて、いろんなことを話せばわかること、そしたらやってくれること。徹底的に寄り添う姿勢をみせてくれた。非常に雰囲気が良くなりました。生徒が変わると保護者も変わる。子どもが嬉々として行くと親も言わなくなる。子どもが元気でいればいい、とよくわかった。そうしたことを意識して行く。雰囲気が地域にも広まると学校を認めてもらえるようになる。

不登校の子もいます。しかし、登校させようと思うことが間違っている。もちろん学校に来てもらうことが一番ですが、登校を目的にすると難しい。職員へのお願いとして、「あなたはうちの大事な生徒だよ。あなたはかけがいのない存在だよ」「我々の大切な仲間」だということを伝えればいい。その後、来るか来ないかは別。伝え続けて発信することで変わるかもしれない。実際、その姿勢で努力するようになると、なんとか来られるようになる子もいます。無事に卒業した子や高校に進学出来た子もいた。自分の思いが実現しなくてはいけない。無理かと最初は思ったが実際、成果が出るので、先生方もきつとやりがいがあった。楽しかったと思う。結果が出るが、慌ててはいけないよ。3年間では結果はでないよ。結果が少し出るとやりがいがあり、次頑張ろうという気になる。これが私の学校の経営の方針です。

## ○地域との関わり

### 伊藤

本題は、地域との関わりです。この地区はPTAや地域の方々の意識が高く協力的な地域です。学校と地域の間わりについて、反対も多くありましたが、阿部さん達も会議に入ってくれるようになり、地域の皆さんの考え方が、子どもへの未来を考えて選択しようという良い方向に向かいました。

初めに、中学校の校長として、子ども達が伸びるためには、自分が出来ることはなんだろう、と考えました。小学校は地域と学校の繋がりについて盛り上がっているけど、中学校は盛り上がっていない。中学生は存在自体が、地域からするとはっきりしない。

小学生と違って地域にいるかいないかわからない。悪いことをすると煙たがられる存在だった。小学生は、どこの地区でも見守りをしてくれたり、イベントがあると参加したり、地域との関わりが割とある。中学生は小学校から中学校になった途端に切れてしまう、と感じたので、何とかならないかな、と。そして中学生自身にも地域の一員だよと自覚できるようなことはないかと考えたところ、夏祭りの後のごみ拾いをするのが有名な学校だったので、伸ばせるとして、いろいろな活動を始めました。

いろんな子がいて、どうせ自分はこんな家庭だから将来もしれているだろうと感じて、自己肯定感の低い子が結構いたので、なんとかしたい。「おまえは必要な子だ」と先生が言っても、「先生に言われても…」ということが子ども達にはある。そうではなく、全然関係のない人が言ったらどうだろうと考えた。全然知らない地域のおじさんに言われたら、本当だと感じる事が出来る。このことが簡単にできるのはボランティアかなと思い、取り組みを始めました。ボランティア募集のために、助成金を使ってボランティアスタッフのジャンパーを作ろう、と。名前が入っているとやる気が出るかな。子供だましかもしれないが、やってみたら好評だった。アピールが出来る。やっていますよ、と。中学生がこんなことをしています、と。普通の服装やジャージでうろうろしていてもわからないので、しっかりロゴを入れてやれば「藤山台中学生頑張っているな」と言われる。たまたまイベントに来た市長も「何やっているのだ。この字間違っていないか。楽校の楽が楽しいという字で間違っていないか」と。中学生に対して、「ご苦労さんだな」といった時に、「やらされているのか。」「違いますよ。僕たちは」と言ってくれたので、すごいねというやり取りがありました。みんなから褒められて自信がついて、またやろうということの繰り返しで今のところ上手くいっている。

生徒会長がユニークな子で、二期連続で会長に立候補してくれて一年やってくれた。彼が、積極的に「もっとやることないですか」と言ってくれたので、地域に存在感の薄かった中学生が、今地域から関心を持たれ、必要とされるという存在になりつつあり、非常に嬉しく思います。これからは生徒には自分達も地域の一員であるということを実感し地域に愛着を持って自主的に地域貢献が出来るような人間になって欲しいなと思って取り組みを続けてきました。

## 野尻

みなさんお聞きになって、こんな先生いるのかな、と思われませんでしたか。「学校とはやりにくいよね、学校って敷居高いよね」とたくさんの方から聞いています。こんな校長がいたら話は早いのに、と伊藤さんのお話から、みなさん思われたのではないのでしょうか。実際にこんな先生がいらっしゃるわけです。

ひとつ気になったのが、子ども達が育つのは、学校と保護者だけではだめだ。地域だぞと最初から仰っていたのですが、伊藤さんが地域だろうと思った経験はあるのですか？

## 伊藤

何かとトラブルが起きやすい子がいた時のことです。その子の保護者に話しても通用しなかったような子がいて。その子と揉み合っている時に、たまたま地域のおじさんが、「お前何やっているんだ」と声をかけたら、その子は、揉み合っているのを止めて「こんにちは」とおじさんに挨拶した、ということがあって。何でこの子は、こちらには歯向かってくるのに、おじさんにはこんにちはと言うのか、という話になった。小さいころから知っていてくれるおじさんだということだったので、その方に時々見に来てくださいと話をした。その経験がありました。

その他にも、いわゆる「おやじの会」に学校に寄ってもらうなどで関わってもらった経験があって。そうした経験から、地域からはいろいろな情報が入ってくるとわかったので、学校を組み立てるうえで、地域は、外せない、と考えています。子どもを育てていく上で、地域が欠かせない。こちらはどうしても悪い面を見てしまうのですが、「いや、あの子はこんないいことをやっていたぞ」、ということが地域から入ってくる。「あの子小さい頃、こういう風だったのだよ」という話を地域から聞くと見方が変わるということです。

## ○地域から見た学校

### 野尻

伊藤さんの話を聴いて、阿部さん、次に地域から見て学校はどうですか？

### 阿部

阿部と申します。よろしく申し上げます。

地域と学校を連携する場所ということで、コーディネーターをやらせていただきました。地域のものからみると、伊藤先生がこのような方とは知りませんでした。中学生の校長先生になると立山の雪の壁よりもっと高い壁があるように、小学校には出入りが出来ても中学校には出来ない。先生方とも気楽にお話することが出来ない。

それが、地域連携教室によって、連携協議会が月に1度出来ます。小学校校長、町内会長、PTAの役員さんなどと、何が必要なのか、どのように変えていくべきかということをお話します。その時、先生から「中学校も変わらなくてはいけない」と聞いた。私達は支援をしなくていけないと思いましたが。子ども達が地域に、というよりも、地域のもものが学校に支援をしなくてはいけないと思っていた。

しかし、中学校が地域に降りてきてくれたおかげで、地域と学校、生徒というようなフィフティフィフティの関係、お互いに影響しながら楽しく過ごす場所だと実感しました。

社協の一年の大きな行事として、三世代ふれあいコンサートや防災があり、中学生がボランティアとして来てくれます。まず、10月29日に行われた三世代ふれあいコンサートです。中学校で行っていますが、前日の準備、当日の運営、コンサートのプログラム作りを中学生が行ってくれます。社協のスタッフは前日準備に行きますが、会場の確認程度で、全部子どもたちが動いてくれます。当日は500名という地域住民が集まってくれました。

どの子からも「こんにちは」「ご苦労様です」と声があり、地域住民からは、「学校が落ち着いて、子ども達が楽しく通っている学校だとよくわかった」との声をいただきました。

これがきっかけとなり、次が、12月9日の防災の集いです。いろんなブースがあり、そこに、中学生が5~6名ずつ入り、スタッフの手伝いを行いました。スタッフから「子ども達が生き生きと笑顔で本当によく動いてくれた、ありがたかった」「体験ブースでは、ゴミ袋を用いたカッパの作り方をただ教えるのではなく、自分で作ったものを着て、会場を走りまわってアピールをしてくれた」「言わなくても積極的に動いてくれた」と言われました。

小学校のほうに、ふじっこ応援団という地域の見守り隊があります。ふじっこ応援団と挨拶していた6年生の子が中学生にあがる、という繋がりが出来ているので、顔をみると中学生のほうから、おはようございますと挨拶をしてくれるようになりました。夫と散歩中に、下校の中学生達が、こんにちはと声をかけてくださって。私は関わりがあ

るので、子ども達が変わってきたなと日々、実感としてありましたが、全く地域と関わりのない夫が「すごいなあ」と挨拶をしてくれたことを感心して話していました。あまり地域活動に関わりのない住民も、中学生をそのように見てくれるようになったことも、繋がりと感じています。

スローガンとして「子どもが地域の宝」だと思っています。地域に幸せを与えてくれる。今、薄かった繋がりが出来つつあるのだと、嬉しく思っています。

#### 野尻

中学生が変わり、地域の見方も変わってきたということですが、見守り隊などの地域住民の場合、また私達がやるのか、みたいな声が出ることもありますが、どのように変わっていったのか教えていただけますか？

#### 阿部

見守りをしているのに子ども達や親御さんがありがとうと言ってくれない、してやっているのに、という意識が住民の方には結構あったような気がします。

朝、子ども達と声を掛け合うことや、ボランティアで地域のお手伝いをして会話をすることによって、関わりの中で、子ども達がかわいいという言葉を使います。

ふじっこ応援団の方が月に2回地域連携室で会議をしますが、会議の中で、今日はこういう子がいたけどどう接していいかわからない、などの話しが出ますが、共有のなかで、「こういう子には、こう接したらどう？」といったやりとりが出てくるようになり、意識が最初より変わってきたと感じます。一番嬉しいのは、地域の子も子ども達がかわいいという見守りの方の言葉ですね。

#### 野尻

お互いに知り合っていくことが大切ですね。あそこの親は…と言っていた人が、親には親の事情がある、私達がどう声をかけるかを考える、といった変容の仕方が、関係性のなかで生まれてくるということがありますね。

#### 阿部

地域住民も、家に閉じこもることなく、一歩前にできれば、変わっていくと声をかけていきたい。

#### 野尻

阿部さんの話を聴いて、伊藤さんに質問です。

子ども達は「俺たちがやってやるんだ」という気持ちなのか。どんな感じでボランティア活動にいくのですか？

#### 伊藤

最初はよくわからないけどやっていると、声をかけてもらえるので、うれしい、やってあげるといふより、認めてもらえる、そのような感覚に変わってきたと思います。自分たちのやっていることが、評価される。自己有用感が高まる。ありがとうと声をかけてもらえる。地域の人に言われると本当だという気になるのだと思います。

---

#### ◎インタビュー映像

生徒会長：二年生の後期から三年生の前期まで務めました。  
藤山台運動会で、初めてジャンパーを着て、みんなと一緒に活動をしました。

Q: ジャンパーを着てボランティア活動をするときはどんな気持ちですか？

A: ジャンパーを着て行くことで、参加しているみんなと一体感が出ます。よりボランティア活動に参加していると実感できます。

Q: 一番楽しかったことは？

A: 参加してくれた方が、帰る際に「お疲れ様でした」と言ってくれた一言がとても自分の心に響いて、嬉しかったです。

Q: なぜ積極的に活動できる人が多いのでしょうか？

A: 地域全体で守ろうという気持ちがあるからだと思います。高齢者が増えていて、若い人が少ないのですが、ボランティア活動で力を発揮したい人が多いからだと思います。

Q: この地域のよいところはどのようなところですか？

A: 小学校当時、学童クラブに行く際に、ボランティアの方が一緒に来てくれて、見守ってくれる存在がいました。優しいかたが多い地域だと思います。今は、自分の力も還元できるようにしたいと思っています。

Q: 地域の方が喜んでくれていると感じますか。

A: ボランティア活動以外でも、出会うと「ありがとね」といった言葉や声をかけてくださり、やってよかったなという気持ちになります。人のためになったなと思います。

Q: 地域の方とお話することはありますか？

A: 藤山台おやじの会の方に入らないかと言われました（笑）

Q: 藤山台中学校の自慢できる場所は何ですか？

A: ボランティア活動に積極的なところや、物事を達成させようと一丸となるところです。人数が少ないからこそアットホームな雰囲気を作れます。ボランティア活動に参加しやすく、他学年でもあまり上下関係がなく出来ていて、少人数の学校の良さだと思います。

Q: 地域の方が中学生に対して、どのような思いを持っていると思いますか？

A: 今までは自分達に見守りを、という感じだったけど、成長して、自分達が地域のために何かしてくれると希望をもってくれていると思います。

Q: みんなの楽校は続いてほしいですか？

A: はい。藤山台地区以外にも連携して、大きな事業をしてほしいと思います。

Q: ボランティア活動を通して、どのような成長がありましたか？

A: 見守ってもらえることが当たり前ではなくなっていて、地域にも家族のような関係を作っていきたいと思いました。ボランティア活動は自分だけでなく、相手もいい気持ちになると思います。参加することで、新たな考えも生まれます。

.....

**○映像から**

**野尻**

インタビュー映像を観ての感想を聞かせてください。

**阿部**

同じ思いでいてくれると嬉しく思いました。地域の温かみを感じ取って、藤山台にもう一度帰ってきてくれるという地域になればと思います。

**伊藤**

おやじの会の人も彼らを認めていて、仲間という感じでやっている。地域の子どもだから、と認めてくれています。

**野尻**

子どもや地域がこんな風になってほしいという考えはありますか？

**伊藤**

自分達も地域の一員であるという自覚を持たせること。役割を与えてあげること。地域の人を認めること。学校や地域にいたことを誇りに思ってもらいたい。ここにいてよかったと思ってもらえたらと思っています。

**野尻**

地域はどのように子どもを育てていきたいですか？

**阿部**

子どもたちにとって、褒めてくれ、認めてくれた人が住むふるさとに帰っていきたくて思えるような地域にしたい。次の世代へ繰り返しができるように、つくっていきたくてと思っています。

**野尻**

中学生への、体験学習を通しての伝え方で意識していることはありますか？

**伊藤**

一番大切なことは、いろんな子を認めていくこと。受け入れていくこと。受容と共感。授業ではなく、こちらがその姿勢で伝えていくことが大切だと思う。気付きとして、変わってあげればいいのかと思っています。

**野尻**

ボランティア活動に対する意識についての伝え方などはどうですか。

**伊藤**

やったことに意味があり、やってみようということが大事です。やればいい、と思っています。後で気持ちがついてきてもいいんです。集まってきたことを評価します。

**野尻**

地域からの中学生に対する見方はどのような感じですか。

**阿部**

若い子に対して、今の子は…という考え方をする人もいます。でも、お互いに、関わらなければ見えてこない。一面だけを見るのではなくて、いろんな関わりがあることで、いろんな見方が出来ると思います。

**野尻**

現在の地域課題についてはどのようにお考えでしょう。

**伊藤**

子ども達と企業戦士だった人をどのように絡めていくのかが課題です。子ども達の様子を伝えていくしかない、と思っています。

**野尻**

子ども達が地域をリードしてくれることもあるのですね。

**〇まとめ ～学校とのつながりでの工夫**

**伊藤**

個性があって、意識が変わらないと難しい。視野が狭くなってしまう。個性を見極めて、考えてもらうことです。いろんな人と会うことで、視野が広がりました。機会がないと見えなくなってしまう。地域の方がリードをしてやっていただければ。相手を見極めて、アプローチを考えてください。(笑)

**阿部**

地域のものが学校に入ることで、先生のお仕事が増えてはいけない。地域に気を遣いすぎて、仕事が増えては意味がない。地域のものが入ることにより、子どもや学校が地域のものを信頼していただき、楽しく仕事をしてもらえることが理想ですね。学校の方も地域と共生していきたいと思っていますと伝えていくことで、共生に向けていくことがいいのかと思います。

**野尻**

平成 27 年 12 月に、国の方針として「地域創生のための学校づくり 地域と学校の連携・協働」が出されました。

何かを企画をするだけでなく、見守りや互いの存在を認めることの繰り返しが、人づくり、人育てになる。見守られたから見守り返す、という恩送りが、地域のなかで、共に生きていく文化をつくっていくのかなと思いました。

「みんなの」という言葉の深みを学ぶことができました。

お礼の意味を込めて、お二人に拍手をお願いします。ありがとうございました。



## 分科会①

# ボランティアを通じた共生文化創造に向けて ～ボランティアの本質を深める～



日本福祉大学 原田正樹氏



地域ボランティアグループかがやき  
代表 近藤京子氏



NPO 法人ボラみみより情報局  
代表理事 織田元樹氏



名古屋市社会福祉協議会  
ボランティアセンター所長 中村弘佳氏

## 第1分科会

【テーマ】 ボランティアを通じた共生文化創造に向けて ～ボランティアの本質を深める～

### 1. 概要・ねらい

今日のボランティア活動は福祉分野のみならず様々な分野、多様な担い手に広がり、他社のための活動に留まることなく、自らの地域づくりにもつながる活動となっている。

その一方で、安易なボランティアの活用など、ボランティアの捉え方が一部で変化している状況もある。そこで第1分科会では愛知県内のボランティア実践者やその活動を支援する社会福祉協議会のこれまでの実践の歩みや課題から、今一度ボランティアの役割や共生文化の創造について、ともに考える機会とした。

### 2. タイムテーブル

時 間	内 容
15:00～15:05	概要・流れの説明 登壇者4名の紹介 登壇者名： 近藤京子さん(地域ボランティアグループかがやき代表) 織田元樹さん(NPO 法人ボラみみより情報局代表理事) 中村弘佳さん(名古屋市社会福祉協議会ボランティアセンター所長) コーディネーター：原田正樹さん(日本福祉大学)
15:05～16:00	円卓会議① 「昔と今のボランティアで変わったこと、変わってないこととは？」 グループディスカッション・全体共有
16:00～16:49	円卓会議② 「“有償ボランティア”で、ありなの？なしなの？」 グループディスカッション・全体共有
16:49～17:00	円卓会議③ 「ボランティアで大切にしたいこと」 グループディスカッション・全体共有
17:00-	全体まとめ・記念写真撮影

### 3. 事例報告・発表等の内容

トークセッション①「昔と今のボランティアで変わったこと、変わってないこととは？」

トークセッションの内容として登壇者の方々から経験に基づく、様々な意見が出た。

近藤さんからは、昔は枠がなく、自由でやりたいことができ、個性的な人がとても多くおもしろかったという。逆に今のボランティアはテーマが定められていることが多く、個性を表面に出さない人が増えた。98年にはNPO法ができ、経営が中心となってきた。ボランテ

ィアは感動しないと動かない。感動でボランティアは継続していくと思う。

また他の登壇者の方々からは、阪神淡路大震災以降、ボランティアに対する想いや使命感の変化が見受けられる。想いが薄まっているように見受けられるが、個性的な人やあまりボランティア活動に興味を持たないような対象者からの参加が増えたなどの意見もあった。

グループディスカッションでは、ボランティアに対して熱い想いを持っている人と大学などで単位や内申点を狙う過程で取組み、想いを持たない人では仕事量が違うという意見や、昔と比べ専門的な技術・知識が必要になったという意見も出た。

#### トークセッション②「“有償ボランティア“て、ありなの？なしなの？」

はじめにグループディスカッション内で青の紙(あり)と黄色の紙(なし)を挙げ、参加者全員で「あり」か「なし」かを確認し、その理由を共有した。

「あり」という人からは、長く続けるための一つの方法として必要ではないかという意見や、学生として経済的に厳しく、有償として何かしらの対価を得ることに越したことはない、ボランティアをする人のニーズに合わせた配慮が必要などの意見が出た。

それに対して「なし」という人からは、有償にすることで目的がお金になってしまい、アルバイトや仕事という感覚になってしまうのではないかという意見が出た。また一つの事例として無償だと聞いて、帰ってしまう人もいるという意見もあった。

これらのグループディスカッション内での意見を聞き、登壇者の方々から多くの意見が出た。

中村さんからは、有償ボランティアというのは、1980年以降に社会福祉協議会(以下：社協)が用いたのが始まり、しかしながら社協としては無償が原則であり、弁当や交通費の支給は無償の範囲内との考え方を持っている。今も昔も、サービスを提供する内容は、継続性が必要であり、組織化し有料とするほうが利用者としても使いやすいのではないかと、この意見が出た。

近藤さんからは、有償ボランティアはあり得ないとの前提で、ボランティアのお礼として、何か物品をいただくのはありかもしれないとの意見が出、コーディネーターの原さんより、「有料」と「有償」では“つぐない”の意味合いが違うなどの意見も出た。

お金が発生しない信頼関係がボランティアであり、金銭が発生すると職務のような感覚になり兼ねないなどの意見が出た。

#### トークセッション③「ボランティアで大切にしたいこと」

初めにグループ内において、自分が思う「ボランティアで大切にしたいこと」を書きだし、グループディスカッションをした。グループ内では「自分もボランティアされる側だということをお忘れなく」、「人とふれあいたいという気持ち」、「相手との交流」などといった言葉が出た。

最後に登壇者の方々からフィードバックがあった。

近藤さんは、「想像する力」が必要だとし、見えないモノ・コトに気づく力が大切だという意見や、中村さんからは「共に生きる、絆」、原田さんからは「地域づくり」との言葉が上がった。織田さんからは「人」、結果「人」が大切であり、といった言葉が出た。

最後に原田さんから、「ボランティアがなくなると、ギスギスするもの。」との話があり、ボランティア精神の大切さについて触れられ、分科会を終了した。

#### 4. 分科会全体のまとめ

今回第一分科会に参加して下さった方々は、ボランティアについて改めて考えていきたいという方ばかりで、3つのトークセッションを通じて、グループディスカッションでは活発的なやり取りが目立った。

全体を通して、ボランティアの昔から今までの変容、そして昨今目立つ、「有償ボランティア」に関する見解、最後にボランティアで大切なこと、と分かりやすく、的を得たテーマ運びで、長年ボランティア活動に従事してきた登壇者をはじめ、参加者全体で議論できたことが効果的であったと感じる。

無論すべてのテーマに対し、答えは存在しないが、「円卓会議」という手法で、登壇者の考えを共有し、参加者と登壇者が一歩踏み込んだ議論を各グループ内で展開できたことも本分科会の魅力の一つであったと考える。

ボランティアとしてかかわり続けていくうえで、自身が得てきた気づきや考えを再確認し、登壇者や他の参加者が得てきた思いを知ることにより、新たな発見を得ることのできた分科会となったのではないかと考える。

また登壇者から発せられるメッセージは、長年ボランティアに関わり続けてきたからこそその考えに溢れており、非常に説得力のあるものばかりであった。そんな登壇者同士のディスカッションも本分科会の最大の魅力のひとつであった。

## 分科会②

### 当事者講師と共につくる福祉教育プログラム



## 第2分科会

### 【テーマ】当事者講師と共につくる福祉教育プログラム

#### 1. 概要・ねらい

福祉教育においては、子どもや大人、学校や地域等の対象やフィールドに関係なく、プログラムづくりの段階から当事者と共につくりあげることが重要です。

しかし、普段から当事者と共につくる福祉教育プログラムについて、その意義や効果等をふりかえりできているでしょうか。「福祉教育に当事者が関わる意義」だけでなく、『関わることにより、具体的にどのようなプログラムが構築でき、効果が生まれてきているか』。

また、『学校・地域・社協と共につくりあげる相乗効果』について、参加者と共に気づき合い、考えます。

#### 2. タイムテーブル

時 間	内 容
15:00～15:05	趣旨説明・登壇者紹介
15:05～16:20	トークセッション <報告者> ○白石清子さん（特定非営利活動法人愛知県難聴・中途失聴者協会） ○山田 弘さん（アンサンブル・アミー 事務局長） <コメンテーター> 清水将一さん（東海学院大学講師） <進行>三好宏和さん（AJU 自立の家わだちコンピューターハウス） 1 「活動紹介」 2 「福祉教育を子どもに伝えていく方法」 3 「学校現場で福祉教育を行う目的」
16:20～16:45	質疑応答等
16:45～17:00	まとめ

#### 3. 事例報告・発表等の内容

##### 1)活動紹介

○白石清子さん（特定非営利活動法人愛知県難聴・中途失聴者協会）

平成14年に聴覚障害3級取得して、平成15年に地元要約筆記サークル入会で福祉実践教室に関わるようになり、今では小学校などで講演をしている。子どもたちにも分かりやすく伝えるためにパワーポイントを使いつつ、講話の時と実際に体験する時と分けてやっている。

また、順序立てて説明することも大切である。例えば、難聴は一番わかりにくいいため「聞

こえ」のバリアフリーの説明や、ゆっくり・はっきり話すなどがある。それでも通じない時は、見える言葉(トータルコミュニケーション)が大切で、手話や要約筆記などがある。

しかし、騒がしい場所や後ろから話そうとするときは肩を叩き気付けてもらうなど、臨機応変に対応することも必要である、と説明して子どもたちに理解しやすいようにしている。

そして、講座名に要約筆記ということを入れているため、簡単な説明をしてから実際にやってもらおうが、本当のメインは「筆談」である。白石さんと実際に筆談による会話をするだけで簡単にコミュニケーションが取れるということを感じることや先生を交えてやるなどすべてを終えて、楽しく時間を過ごせたと思えるように講演をしている。

#### ○山田弘さん (アンサンブル・アミー 事務局長)

小学校5年生で失明して、盲学校や大学に行った。教員免許を取得して就職をするために当時、公務員試験を受験しようとしたが、視覚障害者は事務的作業ができないため受験することが認められていなかった。

教員免許を活かした仕事をするために、自身で子どもたちを集め、学習塾を始めた。そこでは、目の見える生徒に35年間教えてきた。子どもたちに点字の資料を使いながら教えることを通してのコミュニケーションや、子どもたちが私に伝えたいことをどうやって伝えるかなど、これが私自身の福祉教育の実践となる。

このことを学校の先生や子どもたちにも知ってほしいという気持ちから、学校に訪問して、2コマ活用して私自身の話やゲームを通しての障害者の日常に触れることを行っている。子どもたちに教える中で障害者はマイナスのイメージを多く持っていると感じるため、その考え方を解消できるように子どもたちも分かりやすいように伝えている。

例えば、「目が見えなくとも生活の中で大切なものは見える。それは人の心である。目が見えるからこそ惑わされることもあるが、見えないからこそ分かる。」といったように伝えている。

そして、ゲームを通して障害者の日常生活に触れるとともに、どうすれば障害者の方にも伝わるのかなど工夫することの大切さなど楽しみながら考えてもらっている。

## 2) 福祉教育で子どもに伝えていく方法や工夫

#### ○白石さん

子どもに障害名を告げるのではなく、子ども自身がどのような障害を持っているかを自分で考えるようにするために、自らの補聴器を派手にして髪の毛も短くして補聴器をできるだけ目立つようにしている。

また、授業ではわざと聞こえない場合を想定して、子どもたちに聞こえないことを分かりやすく伝えていることもある。

これらのように、福祉教育では子どもに伝える方法として子どもに自主的に考えてもらえるようにすることが大切である。その工夫の1つとして授業では、小さなホワイトボード

を用意する。それを使って子どもたちが自分で書いて会話できるようになると楽しい。

○山田さん

小学生に福祉教育を伝えることはとても難しい。最初は45分の授業のみだったが、短すぎるので増やしてほしいと要望したこともある。

また、実物を見せることが大切で映画（シーンボイス）や絵画（立体的なもの）、点字地図を自分でそろえて持っていく。子どもたちに興味を持ってもらうために、実物を使って先生とゲーム（お金を手で触って、金額をあてる等）をすることもあつた。子どもたちには、できなくても工夫すればできることを伝えている。

このことにより、日常生活で障害者は苦しいことだけではなく楽しいこともあると理解してもらうことができる。

○清水さん

白石さんのように子どもたちに体験をしてもらうことを重視し、それとともに追体験をしてもらうことが大切である。

また、山田さんのように教材選定や発達段階に合わせて楽しくする教材の工夫は大切である。

### 3) 学校現場での福祉教育

○白石さん

要約筆記をベースに学校で福祉教育を行っているが、子どもの感想で「上手くできた」「難しかった」などの感想が非常に多い。

しかし、私自身は要約筆記についてのテクニックや難易度などを伝えたいわけではなく、福祉の本質について伝えたい。

○広さん（三好さんからの指名で実行委員として）

学校から福祉教育を依頼された時、何を子どもに伝えてほしいのかを学校の先生に伺ったら、なんでもいいから話してほしいと言われた。その時、先生自身が福祉教育を理解していないと感じたので、学校で行う場合は先生にまず理解してもらわなければいけない。

○三好さん

車いすの授業では、先生に乗ってもらうこともある。先生自身にも考えてもらう機会としてたり、子どもたちも先生が行うと興味を持ってくれたりする。また、普段着けている手袋を子どもたちに見せると興味をもってくれて自然と距離が近くなる。

#### 4. 分科会全体のまとめ

福祉教育を学校・地域・社協で取り組む時には、当事者の立ち位置としては地域となるのではないかと。そして、地域住民として子どもたちに日常生活のなかの喜怒哀楽を伝えられるのは当事者であり（社協ではできない）、当事者はかわいそうとか、助けられる側ではないことを伝えることも大切である。

そのために、常に試行錯誤しながらどのようにしたら子どもたちに上手く伝えられるのかを考えている方々が報告者のみならず参加者にも多くいらっしゃった。

今後、報告いただいた当事者講師のみなさんが福祉教育で実践されていることをヒントとさせていただければ、各地域での福祉教育がより良いものになっていくのではないかと感じた。



## 分科会③

学校・社協・地域がつながる福祉教育  
～「ともに生きる力を育む」学びの実践から～



### 第3分科会

【テーマ】 学校・社協・地域がつながる福祉教育 ～「ともに生きる力を育む」学びの実践から～

#### 1. 概要・ねらい

子どもたちが「ともに生きる力を育む」ために、学校と地域がつながり、どのように福祉教育に取り組むかがカギとなります。地域の多様な方々との出会いや関わりを通じた学びの機会を作るためには、学校だけでなく地域とつながりがある社会福祉協議会と協働することで、より豊かな学びへと高まります。本分科会では、学校・社協・地域が協働した小学校と高校の実践事例とディスカッション等を通して、「つながる意義」や「つながるために必要なこと」を共有し、「ともに生きる力を育む」福祉教育の展開について参加者とともに考えます。

#### 2. タイムテーブル

時 間	内 容
15:00～15:10	オリエンテーション 分科会の趣旨説明 河村康英（知多市社会福祉協議会）
15:10～15:40	事例報告①「岩倉市岩倉南小学校 福祉教育プログラム」 森 冬起さん（岩倉市立岩倉南小学校教諭） 石井 太一さん（岩倉市社会福祉協議会職員）の実践報告 コーディネーター：小林 洋司さん（日本福祉大学）
15:40～16:10	事例報告②「高等学校における家庭科の専門科目 「生活と福祉」社協 との関わり～出会いふれあい交流会～」 佐々木 早苗さん（愛知県立古知野高等学校教諭） 鈴木 秀明さん（江南市社会福祉協議会職員） コーディネーター：小林 洋司さん（日本福祉大学）
16:10～16:50	ディスカッション 森 冬起さん（岩倉市立岩倉南小学校教諭） 石井 太一さん（岩倉市社会福祉協議会職員） 佐々木 早苗さん（愛知県立古知野高等学校教諭） 石塚 博幸さん（きららハウス） コーディネーター：小林 洋司さん（日本福祉大学）
16:50～17:00	まとめ

#### 3. 事例報告・発表等の内容

(1) 事例報告①「岩倉市岩倉南小学校 福祉教育プログラム」

森 冬起さん（岩倉市立岩倉南小学校）、石井 太一さん（岩倉市社会福祉協議会）

岩倉南小学校では「車いす体験、アイマスク体験」などの体験型福祉教育を行っていたが、技術のみの体験になってしまうおそれがあるのではないかと感じたことがあった。技術習得ではなく「みんなが幸せになるために」を考えていく学びこそ福祉にとって大事なこと。子どもたちが地域社会の一員であることを自覚してもらうねらいから体験型ではない「福祉教育プログラム」が始まった。小学4年生対象に1年間をかけて福祉について考えていく取り組みを行う。最初の授業では、社協職員からふくしについてお話をを行い学びの導入を行ってもらう。その中で社協職員から子どもたちへ「ふくしって何色？」という問いを行うと「黒、青」のようなマイナスイメージの回答が多かった。

2回目以降は、車いすの利用者等当事者の方との交流が行われる。自己紹介を通して子どもたちと当事者が交流していく。この時点では当事者の「障害」だけを注目してほしくないため、好きなことや趣味などが書かれたカードを活用してお互いを知る機会を大切にしていく。また、当事者と校内探検を行い子どもたちの視点と当事者の視点で校内のやさしいところや危険なところ等のユニバーサルの視点について学んだ。

そして、当事者と一緒に楽しめるゲーム等を通してお楽しみ会を行い、最後にこれまで関わってきて学んだこと等の発表を行った。最後の子どもたちの感想で「ふくしは虹色です」という感想が出る等考え方の変化があった。（最初は黒、青等のマイナスイメージだった）

当事者の生活を知り、継続的に学びを重ねる中で真剣に考える生徒が増えてきた。最初は「福祉」と聞いても子どもたちの反応があまりなかったが、交流を重ねるごとに「誰に対しても優しく接する言動」が見られた。効果として教員でカバーできない部分を専門的な知識を持っている社会福祉協議会の方と一緒に作りあげてきた部分が学びにつながったと思う。

## (2) 事例報告②「高等学校における家庭科の専門科目「生活と福祉」社協との関わり ～出会いふれあい交流会～」

佐々木 早苗さん（愛知県古野知高等学校）、鈴木 秀明さん（江南市社会福祉協議会）

高等学校の家庭科の授業「生活と福祉」を実施することになり、自分の専門ではない福祉について、どのように生徒に伝えていく必要があるかを悩んでいたときに社会福祉協議会に相談したことがきっかけで新たな福祉教育の方法を実践することができた。

この活動は、1年間を視覚障害の方と関わりながら「ふだんの生活」を学び、その中で何が大切なことなのかを学ぶ内容になっている。自己紹介からはじまり、質問交流企画等、好きな歌手や好きな有名人等、お互いの接点を探しながら、楽しみながらお話しを行う。最後には生徒も視覚障害の方も一緒になって楽しめる交流企画を実施することを大切にしている。活動を重ねる中で、生徒は「人それぞれの生活の質（いきいきすること）を考えること」「ふくしは、自分にも関係があることや支援や助け合いの前提にはお互いの

信頼関係が大切なこと」「知り合うこと、関わるのが大切なこと」を学んだ。

社協職員の鈴木さんから「今までの交流をもとに、何かゲスト講師と生徒と一緒に楽しめる企画を考えましょう」と言われた。改めて生徒も主体的に今までの交流の中で「好きなこと、できること、何か工夫すること」等を考えていった。この考える過程こそが学びになっていると感じたと共に、ここに「共生」があるのではないかと気づききっかけになった。実践のなかで生徒は普段教師や先生という存在に慣れていることも多いため、外部からゲストに来ていただけることで、緊張感も生まれ、生徒にとっていい影響を与えていると感じている。

## ディスカッション

### 【テーマ① 先生の悩み 社協の悩み 地域の悩み】

先生の悩みは「(先生にとって福祉を考えることは) 空のお弁当箱を渡されるようなもの」、「福祉」については正解がなく、どのような授業をしていくのがよいか悩むことが多い。社会福祉協議会の方と話しあいながら考えていくなかで、自分(先生)自身が、受け身であったということに、気づかされることもある。

社会福祉協議会の悩みは、従来からの福祉教育(車いす教室、アイマスク体験等)も長年継続しており、授業内容を変える等、学校にどう提案してたらよいのかという悩みもある。学校の教員は「総合」や「福祉」だけを考えるだけではないため、業務負担もあるので無理に提案することも難しいこと、講師謝金の負担等の意見が出された。

### 【テーマ② 先生から見た社協 社協から見た先生 地域から見た社協・先生】

社協から教員には「1年間の福祉教育プログラムについて負担ではないか」地域の人から教員には「地域で何かおきたとき(例、小学生の登校中、道で出会った障害者の方を見て、小学生が防犯ブザーを鳴らした場面)に学校に連絡するべきなのか」という意見が投げかけられた。この意見には、教員から地域に対し、問題が発生した際には「行動について問題」と捉えるだけでなく、「なぜ、どうして」等、子どもと先生等、みんなで考えていくよい機会として考えていきたいと思っているため、学校に連絡してほしいとの意見。

### 【テーマ③ 学校・社協・地域がつながる成果って】

学校等で交流を意識した福祉教育を行う中で、関わった講師のことを生徒が地域で会ったときに声をかけることがあると言う。学ぶ前は、生徒も「障害」というものを理解していないがゆえに怖いというイメージがあったが「知ること」によって、怖いというイメージがなくなると言われた。知り合うこと、関わることで共生につながる部分も大きいと感じる。また生徒が主体的に学ぶことができ、学びの楽しさを感じていくことができる。生徒の変容の中で先生自身が学ぶことが多いとの意見もあった。

#### 4. まとめ

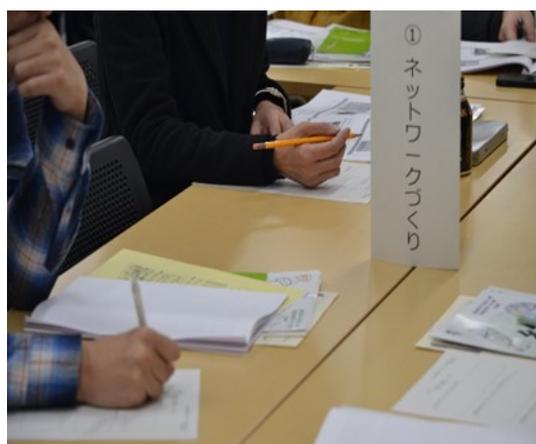
学校・社協・地域がそれぞれの立場があり、それぞれの悩みを抱えながら福祉教育を実践していることが把握できた。お互いに遠慮している部分もあるためお互い歩み寄りながら福祉教育を考えていくことが求められている。

学校・社協・地域がつながる福祉教育とは、「教える」ことではなく「引き出す」こと。学校は地域のど真ん中。つまり学校は地域のパブリックである。子どもたちは自分たちがしてもらったように地域に返す。それに関わる大人や子どもの実践が地域の愛着形成をつくる。これが共生社会を文化にしていく営みではないかと感じた。



## 分科会④

### 「地域包括ケア」の推進プロセスにおける学び合い



日本福祉大学 末永和也氏



地域福祉サポートちた代表理事 市野恵氏  
絆代表理事 山崎紀恵子氏  
チームにじ代表 杉浦政代氏

## 第4分科会

【テーマ】「地域包括ケア」の推進プロセスにおける学び合い

### 1. 概要・ねらい

困りごとを抱えた人を地域全体で支える「地域包括ケア」を進めるためには、住み続けたと思う地域の姿を地域住民と行政や医療・福祉・介護専門職、NPO、教育機関などが共感し地域の課題に基づいて支援のための仕組み・サービスを協働・多職種連携でつくりだしていくことが重要であるといわれる。

知多半島で「0 から 100 歳の地域包括ケア＝支えあうコミュニティづくり」をめざして、「人づくりに取り組むNPO法人」や「ちた型地域包括ケア」の事例を中心に支え合うコミュニティづくりを進めるための協議や学びの場づくりとそこでの想いの共有を通じて、地域住民や多様な分野の専門職の意識や行動がいかに変化したのかに注目して、学び合いについて検討する。

### 2. タイムテーブル

時 間	内 容
15：00～15：03	分科会の趣旨説明
15：03～15：13	導入「地域包括ケアの推進と学び合い」 末永 和也さん（日本福祉大学/日本福祉教育・ボランティア学習会）
15：13～16：13	実践事例報告「0 から 100 歳の地域包括ケアのまちづくり」 市野 恵さん（特定非営利活動法人地域福祉サポートちた 代表理事） 山崎 紀恵子さん（認定特定非営利活動法人絆 代表理事） 杉浦 政代さん（ボランティアグループ チームにじ 代表）
16：13～16：43	グループディスカッション（共有） テーマ ①ネットワークづくり ②場づくり ③人（地域住民、ボランティア、専門職など）づくり ④まちづくり ⑤資金づくり
16：30～17：00	全体共有・まとめ

### 3. 事例報告・発表等の内容

(1) 基調説明（導入）「地域包括ケアの推進と学び合い」

末永 和也 さん（日本福祉大学/日本福祉教育・ボランティア学習会）

今後、高齢者人口が増え続けていき、支えていく世代が少なくなっていく。これから大切

になってくるのは、地域共生社会の実現である。実現のためには、平成 28 年 6 月に閣議決定された「ニッポン一億総活躍プラン」をめざしていくことが重要である。このプランのポイントとしては、支える側・支えられる側に分かれるのではなく、お互いに支え合うことにある。また、子どもから高齢者までの地域住民の一人ひとりが役割を持つことも大切である。

厚生労働省が示す地域包括ケアシステムの構築は、高齢者に重きを置いている。一方で、知多半島では地域住民らが「0 から 100 歳の地域包括ケア」を目標に掲げ、支え合うコミュニティの構築を目指している。支え合うコミュニティづくりを進めるためには、地域住民の主体的に考える意識・行動の変化や中間支援組織の立場からの支援が不可欠である。

この分科会では、事例報告やグループワークを通して地域住民が主体的に助け合う活動のプロセスを明らかにすること、さらにそのプロセスにおける課題に対する地域住民や専門職などの関係者の理解や学習がどのようなものであったかを明らかにしていきたい。

## (2) 実践事例報告「0 から 100 歳の地域包括ケアのまちづくり」

市野 恵 さん（特定非営利活動法人地域福祉サポートちた 代表理事）からの報告

### 【知多地域の概況】

まず地域の概況を説明すると、知多半島は 5 市 5 町で構成されている。北部は名古屋南部、衣浦の臨海工業地域の埋め立て地域であり、昭和 30～40 年にかけて転入者が増え、東海市や武豊町などの人口が倍増していった。南部は、農業や漁業、海苔産業、観光、レクリエーションなど元々の地場産業を活かしている。人口は知多半島全部で約 6 万 2 千人である。高齢化率は北部に位置する大府市では 21.4%。南部では 35.5%である。

知多地域の福祉 NPO の始まりは、平成 2 年に佐々木幸雄さんが介護の過酷さを経験し、東海市に家事援助ボランティア団体「ふれ愛」を立ち上げた。東海市では他県からの転入者の高齢化が進み、血縁内で家事などの手伝いの協力を得ることができない人が多かった。最初は無償で行っていたが、「無償で手伝ってもらっていると頼みづらい」との声が上がり、有償ボランティアに変わったことで家事援助サービスとして社会の仕組みがつくられ、これを基に知多半島の福祉も進んでいった。

当時ボランティア団体の仲間づくりや場所、PR など団体を応援するような活動がなかった。自分たちで「団体支援をやっていこう、そして想いを伝えていこう、まちづくりを進めていこう」という思いを持った人達が「地域福祉サポートちた」を設立した。中間支援として自立して運営していくためにヘルパー養成講座を人材育成の柱とし、中間支援として、知多半島の団体の人材育成に努めた。

### 【0 から 100 歳の地域包括ケアシステムと知多地域円卓会議の概要】

7 年前に自分たちのやっているまちづくりの活動はなにができていないのか、「地域福祉サポートちた」の理事が集まり話し合いを行った。結果として、その当時「できているまち

づくりは氷山の一角であり、行政が行っていることだけでないか、もっと困った人の問題や住民に啓発していかなければならない」と気づいた。そのスローガンとして「0から100歳の地域包括ケアのまちづくり」を掲げた。ネットワークと協同の実績は、要介護状態に高齢者の場づくりとして居場所づくりを行った。更に、サポートちたの「場づくり」事業を活用し、地域包括ケアのまちづくりを目的に、助成金を取得して円卓会議を開催した。半田市と東浦町をモデルに、テーマを「誰もが安心して暮らせる住民主体の地域連携づくり」として、それぞれの地域で会議を3回開催した。

東浦町における円卓会議のメンバーは、東浦町の認定特定非営利活動法人絆の代表である山崎さんに事前に相談し、地域のキーマン8名に呼びかけていただいた。つながりを深めるため、会議開催に向けて事前の打ち合わせを入念に行った上で開催された。

山崎 紀恵子 さん（認定特定非営利活動法人絆 代表理事）からの報告

#### 【東浦町における円卓会議の構成】

円卓会議での私の役目は、町づくりが進むことを目指してどのような人選をすればよいかを考えることだった。東浦町にはボランティア団体はたくさんあったが、福祉分野のNPO法人は絆以外になかったため選ぶのに苦労した。結果、地域の小さな活動団体や企業の代表（30～60代）8名を紹介した。

8名のメンバーは、福祉課職員、サロン連絡会の会長、地域包括支援センター職員、社会人学生、民生児童委員、リサイクル業者、訪問看護ステーションの管理者、NPO法人のスタッフである。

「この人がいれば、行政との連携の突破口が開ける」「行動力や迫力がある。この人ぬきでは考えられない」「これまでの職業経験から0から100歳の地域包括ケアはこの人ぬきでは語れないほどの人材がある」「様々なボランティアをされ、地域での信頼が厚かった」「心は熱く、頭は冷静、見極められる仕事ができる。地域包括ケアには医療分野ぬきでは考えられない」「企業とつながりたい」等の理由からメンバーを選出した。

#### 【円卓会議の開催経過】

第1回円卓会議では、「なぜ自分が呼ばれたのかわからない」という声もあったので、東浦町の問題に加えて、メンバーそれぞれの取り組みを共有する話し合いから始まった。話していく中で重度の身体障害のあるMさんにメンバーそれぞれ関わりがあるという共通点が見つかった。ただし、それぞれの立場があり、まだ心は開いていなかった会議であった。

第2回の会議では、目指す町の姿について意見を出し合い、自分たちの立場でそれぞれできることを具体的に考えた。たまたま東浦町の地域福祉計画の策定委員に円卓会議のほとんどのメンバーが選ばれた。それから地域福祉計画を意識しながら、地域のニーズを具体的に捉えながらどのように進めていくか、考えるようになったが、まだ関係性はできていなかった。

第3回目の会議では訪問看護ステーションの管理者が、「まちの保健室をずっとやりたい

と思っていた」と意見ということを皮切りに、「0 から 100 歳が集える場所があったらいいよね。」「なんとかつながりあえる仕組みや居場所があったらいいよね。」という話になった。そして、第3回の円卓会議で終わることをメンバー全員が惜しみ、他職種連携ボランティアグループ「チームにじ」が結成された。最初の活動は、絆が東浦町から委託を受けた「支え合いたい体制づくり事業」で資金をもらって映画会を開催した。協同で取り組むことでお互いを知ることができ、信頼関係ができた。さらに、「みんなでつくる あしたの東浦」をコンセプトに、チームにじ独自のイベントとしてシルバーフェスタを行うことになった。

杉浦 政代 さん（ボランティアグループ チームにじ 代表）

#### 【シルバーフェスタの開催】

チームにじでは「地域で安心してくらしたいけるように、行政や関係団体は頑張ってくれているけど、実際には必要な情報は住民に伝わっているのだろうか」という視点から、シルバーフェスタを開催して、行政と違った形で情報提供しようと考えた。様々な地域住民がこのイベントを通して、情報を得たり、交流してみんなが笑顔で楽しい時間をつくってほしいと考えたが、資金がなかった考えた末、福祉施設のブースを設け、ブース料金によって資金調達し開催できた。

第1回目の集客は500名のうち約150人はボランティアだった。メンバー一人ひとりがものすごい力を持っている影響もあり、多くの施設や人を集めた。

訪問看護ステーションの「まちの保健室」や65歳成人式メンバーによる体験コーナー、保健センターのコグニサイズなど様々なブースを15団体出展した。それぞれが団体PR、相談受付を地域住民に向けて行った。アンケート調査の結果、「東浦町にはこんなにも団体があり生活していくうえで安心だ」という意見があった。

第3回シルバーフェスタでは、開催を心待ちにしてあらゆる団体に相談をすることを考えている人がいた。

来場者は笑顔で「楽しかった」、ボランティアは「自分の役割があり、やりがいを持ってやっていた」と話していた。シルバーフェスタは回を重ねることで町のイベントになった。東浦町も資金を出してくれるようになった。

#### 【森岡台における取り組み】

しかし、シルバーフェスタの開催だけで満足せず、チームにじとして、「地域住民と地域が抱える問題を話し合っていきたい」、「自分たちができることをみんなで考えていく、探し出していききっかけづくりをしたい」と考えた。

そこで、ちた型0から100歳のまちづくり助成金事業を用いて、高齢化率の高い自治体調査と自治区住民との学習会、現場見学を行った。

高齢化率の高い自治会を調査した結果、森岡台は高齢化率50%で核家族が多いことから今後一人暮らしの高齢者が増えていくと考えられたので、20～80歳代の地域住民と円卓会

議を開催した。80歳代の方から「朝の6時30分からラジオ体操をしたい」と意見が上がったことをきっかけに、森岡台を住みやすい地域にしようと実行委員会が発足した。

森岡台では、ボランティアグループ「ラポール もりもり」が結成され、ラジオ体操、講演会、認知症サポーター養成講座など学習会、他の地域へ現場見学、自治会の協力を得て調査を実施した。アンケート調査表は直接回収に行き、回収率92%であった。他に、ヒアリング調査も行った。意見として「今は特に困ってない」という人が多くいたが、10年後20年後を見据えて、地域住民自身が担い手となれるようなればいいと思い動いた。

活動は、集まるきっかけがとくに大事になってくる。集まることにより自治体、行政が動き出してくれる。地域住民自身が動くことが大切である。

### (3) グループディスカッション

#### ①ネットワークづくり

事例報告について、きっかけづくりの大切さやささいな希望が住民を集め地域が動いていくなどの感想が上がった。組織のまとめ方や意見の食い違い、組織への熱量で悩んでいる方の話を中心に、それぞれ参加者の経験を基に、組織やチームの作り方、進め方を議論した。「円卓会議の中でどのように共有の意識ができていくのだろうか」という質問があげられた。

#### ②場づくり

地域で居場所づくり支援を行う実践者3人、学生が参加し、それぞれの活動についての悩み「年の離れた参加者と交流ができない」「活動の内容が地域に広まらない」「予算がない」「協力者が増えない」「やっと思った実践の内容が不評」等を共有した。

グループの話し合いに参加された絆の山崎さんからは、チームにじの杉浦さんの「とにかく行動を起こすことが大切だ」との発言を皮切りに、他の実践者も今後の展望などについて話し合い、改めて“実践”の重要性が確認され上手く進んだ事例が紹介された。

#### ③人(地域住民、ボランティア、専門職など)づくり

社会福祉協議会職員、行政職員、地域で何か役に立つことをやりたいと考えている地域の方、大学職員、福祉系大学志望の高校生、日福大の卒業生が参加し、日々の実践のなかで感じている思い、地域のなかでうまくいかなかったこと、今後の構想などが共有された。

自らの役割や個人として、何ができるかを日々模索して実践しているが、根幹は人づくりなのではないか。いかに人を育てるかが重要だと感じているとの声があげられた。

グループの話し合いに参加されたチームにじの杉浦さんからは、「それぞれの人材の良いとこどりをすること」、「(人を介して) 機関の特権(強み)を出してもらうこと」、「人が集う場をつくること」が大事ではないかとのお話を伺うことができた。

#### **④まちづくり**

生活支援コーディネーターや地域福祉コーディネーター、町会議員などが参加し、事例報告をもとに、それぞれの専門職の視点から「まちづくり」について意見を交換した。実際にそれぞれの現場で、「まちづくり」に対してどのように取り組みが行われているのか、そこで苦勞していることを共有した。

「チームにじの成果として、ラポールもりもりがつくられたことに関して、お互いの関係性やどのように連携をしているのか」について質問があげられた。

#### **⑤資金づくり**

参加者は、資金づくりについて、意見を交換した。資金づくりには、同じ気持ちの人がいることが大切で、キーマンの存在も重要である。キーマンを探すためには、腹を割った話し合いが必要であり、一緒にお酒を飲みながらの議論は有効である。集まったメンバーの一体感を出すためには、一緒に何かを行い、共通の意識を持つことが大事であるなど資金づくりにつながる意見交換がされた。

グループに参加されたサポートちたの市野様からは、シルバーフェスタのブース料についての発想は、チームにじには行政職員もボランティアとして参加しており、自分たちで何とか資金を調達しようという想いから生まれたものだった。また、あいちコミュニティ財団から 50 万円の助成金を得て、それを基に、ラポールもりもりの地域円卓会議も始まった。

#### **4. グループディスカッションの全体共有を受けて登壇者から一言**

市野：会議をすることが目的ではない。組織の位置づけやそれぞれ個人の考えを話すこと。その1つの方法として、飲みニケーションによる関係づくりを行っていくことがある。

山崎：チームにじは抜けた人もいたが、新しくメンバーが入り今は13人で構成されている。その人のよいところを見ることやしかけを作っていくことで、参加する人を増やす。

杉浦：シルバーフェスタといっても、若い人も参加できるイベントをたくさんつくっている。ラポールもりもりの資金は、補助があったから余裕ができた。後にはチームにじがついているから、という安心感が活動を継続することができるのではないか。

#### **5. 分科会全体のまとめ**

実践事例報告やグループディスカッションを通して、テーマでもある地域包括ケアの推進プロセスにおける学び合いを進めていくには、①ネットワークづくり、②場づくり、③人づくり、④まちづくり、⑤資金づくり、だけでなく、まず住民や関係者のためになにかの関係づくりやきっかけづくりを行うことが大切ではないか。なにかきっかけができると住民の意識が変わってくる。そこから住民の集まりになり自治体や行政が動き、地域全体の意識改革になる。それが0から100歳の地域包括ケアという目標に繋がる。

地域活動を通して、地域課題を我が事としてどう関わっていくのかということに参加者

と共有することができた。

---

2018

# 福祉教育・ボランティア学習のつどい

i n あいち・なごや

## ～共生文化創造への途～

### 開催概要

---

#### 1 メインテーマ

「共生文化創造への途」

#### 2 開催主旨

地域共生社会の実現にむけて、様々な取り組みが始まっています。とはいえ「共生社会」をつくることは難しいことです。地域社会には、「優しい顔」と「冷たい顔」があります。身近な地域であればあるほど、共に生きるということは理想でもあり、一方で難しい現実も多々あります。とはいえ、私たちはそのことを「理想だから」で終わらせずに、どうしたら一歩でも近づくことができるか、真剣に考えて行動を起こさない限り、実現はできません。そのときに大切にしたいことが「ネットワーク」です。一人が頑張るのではなく、みんなで頑張る。そのことで共生する楽しさが生まれます。そのときの感動や勇気が共生の文化を育む礎になります。

2009年、私たちは日本福祉教育・ボランティア学習学会を、ここ愛知で開催しました。そのときのテーマが「共生文化創造への途」でした。私たちは共生を「文化」にまで高めなければ定着しないと考えていました。あれから9年が経過し、2018年11月に再び、愛知で第24回大会が開催されます。今回のつどいは、大会本番にむけたプレイベントとして位置づけています。県内の多くの関係者が集い、11月にむけて愛知から発信できる内容を検討していきたいと思っています。

「福祉教育・ボランティア学習」は、福祉、教育、ボランティア、学習が、様々な織りなしい、多様な可能性を生み出します。ぜひこのつどいを通して、多くの皆さんと一緒に共生文化の創造にむけて一歩を踏み出しましょう。

#### 3 主催

日本福祉教育・ボランティア学習学会中部ブロック  
社会福祉法人愛知県社会福祉協議会  
社会福祉法人名古屋市社会福祉協議会

#### 4 共催

あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会

## 5 後援

日本福祉大学

愛知県、愛知県教育委員会

名古屋市、名古屋市教育委員会

東海市、東海市教育委員会

## 6 開催日時

2018年2月10日(土) 13時00分～17時00分

## 7 会場

日本福祉大学東海キャンパス(愛知県東海市大田町川南新田 229 番地)

## 8 参加対象

福祉教育に関心がある方または福祉教育の推進に携わっている方

日本福祉教育・ボランティア学習学会会員

## ■実行委員会からのメッセージ

～「つどいを終えて・・・私たちが想うこと」～

今回は「当事者講師と共につくる福祉教育プログラム」というテーマで分科会を開催させていただきました。改めて当事者講師の方の想いをお聞きして、子どもたちにどのように伝えるかで子どもたちの受け取り方が大きく変わることを実感しました。今後も当事者講師の方々にご協力いただきながら、学校での福祉教育がどの地域でも実践されていくことを願います。

石黒 学（愛知県社会福祉協議会）  
前川 保夫（愛知県社会福祉協議会）  
酒井 理恵（愛知県社会福祉協議会）

今回初めて実行委員として参加させていただきましたが、自分が取り組んでいる日々の活動が福祉教育に直結しているのかもしれない…と感じさせていただきました。福祉教育あるいは福祉そのものの形が変遷をしていく中で、常に新しい視点から「福祉」を捉えることの重要性に気づき、当日はこんなにもたくさんの人が思いを寄せていることに感動しました。

石塚 博幸（きららハウス）

このつどいは実行委員会形式で企画・運営を行っています。準備段階から登壇者との打合せを含め、その熱量が高く、当日の参加者にその熱量が「伝わる」のではないかと感じています。共生文化を創るプロセスは、その熱量が大切であり、11月の第24回あいち・なごや大会ではさらなる熱量を高めていきたいです。あいち・なごや発の共生文化創造への途の物語は続きます。

伊藤 光洋（江南市社会福祉協議会）

分科会4では「地域包括ケアシステムにおける福祉教育機能」をテーマとして、知多型地域包括ケアのまちづくりについて深めました。地域住民が集まり、話し合い、つながって活動が生まれ、さらには行政を動かすというプロセスは、まさに「まちづくり」のうねりなのだと感じました。今回は来年度のあいち・なごや大会に向けたプレ企画という位置づけでもありましたが、このつどいを足掛かりにして大会に向けてつながりを広げていきたいです。

大津 裕昭（名古屋市社会福祉協議会）

「0から100歳の地域包括ケアのまちづくり」のグループディスカッションのなかで、「それぞれの人材の良いとこどりをすること」、「機関の特権（強み）を出してもらうこと」、「人が集う場をつくること」が大事との言葉が印象に残っています。一人ひとりの強みを生かすことと、それを地域のなかでつないでいくことにより、皆でつくりあげていく「町づくり」ができるのではないかと思います。

大林 由美子（日本福祉大学）

事前準備や当日に関わったことはとても刺激になりました。それぞれの考えや思いを伝え合うことで共通理解や目指すものに気づくことを体感できました。現在、多世代の方と仕事が多い中、

立場や考え方、また大切にしていることはそれぞれ異なります。お互いの違いに気づき、それを認め合えるような関係作りに携わっていきたいと思いました。

加藤 洋介（半田市社会福祉協議会）

第4分科会では、地域包括ケア構築プロセスの事例を通して、住民がどのように出番・役割を見出し、住民主体のまちづくりを進めていったのか。そのプロセスではどのような教育的働きかけがなされたのかを参加者のみなさんと一緒に考えました。今回、あらためて住民主体とは「共に生きる」ことであって、その実現には福祉教育という考え方が大切だと思いました。

金治 宏（愛知淑徳大学）

学校・社協・地域がつながる福祉教育とは、「教える」ことではなく「引き出す」ことというメッセージをいただいたように思う。学校は地域のど真ん中。つまり学校は地域のパブリックである。子どもたちは自分たちがしてもらったように地域に返す。それに関わる大人や子どもの実践が地域の愛着形成をつくる。これが共生社会を文化にしていく営みではないかと感じた学びでした。

河村 康英（知多市社会福祉協議会）

2009年に「日本福祉教育・ボランティア学習学会 あいち・なごや大会（第15回大会）」が開催された。この2年前から自主的な研究会を立ち上げ、日頃の研究や実践を報告・協議し開催に至った経緯がある。今回のつどいは、第24回大会（2018）を再びあいち・なごやで開催するプレ大会の位置づけであった。第15回大会からあいち・なごやで継承してきた「共生文化創造への途」がどれほど進んだのか。虐待防止、差別解消、たそがれ同居、地域福祉計画など、状況変化を踏まえつつ、さらに福祉教育研究における共生の理論化と実践における実体化が求められている。

後藤 康文（岐阜経済大学）

私は2017年に日本福祉大学に赴任した。今回のつどいでは実行委員会から本当に多くの実行委員、関係者の方々がまさに力を合わせてつくりあげられた。そのちからに本当に驚かされその一員に入れていただけることに喜びを感じた。2018年度の福祉教育・ボランティア学会も、大きく盛り上げ、意義ある大会にしていきたいと心から思っている。

小林 洋司（日本福祉大学）

今回のつどいでは、当日裏方役に徹し、右往左往走り回っておりましたが、参加者・登壇者・実行委員のみなさんが、高い意識を持ってこの「つどい」に関わってくださっていることを再確認することができました。このつどいを経て、11月末の大会に向けて、あいち・なごや発の「共生文化創造への途」をしっかりと紡いでいきたいです。

櫻井 悟（美浜町社会福祉協議会）

「地域の人と関わることは楽しい」藤山台中学校生徒会長の言葉が耳に残ります。地域共生社会の創造は、お互いが理解し合い・学び合い・そして地域で暮らすことが「幸せ」と感じる社会

を共に創ること。私たちが「意識」をして取り組まなければなりません。何より、地域住民との関りを「楽しい」といえる素敵な大人達との出会いを、本学の学生にもたくさん経験をさせたいと切に願っています。

佐藤 大介（日本福祉大学）

「ボランティア」はどのような役割を担っているのか。ボランティアという言葉が広がり、地域共生社会の実現が目指されている今だからこそ、改めて考える必要があるのではと第1分科会を企画しました。分科会の中で参加者と共に考えた「ボランティアで大切にしたいこと」、このことをみんなで考え・学ぶことが共生文化につながっていくのだろうと感じました。

澤野 千夏（名古屋市社会福祉協議会）

地域課題を「我が事」として考えていく…、その意識はこれから醸成していくものだと思っていましたが、私は何か勘違いしていたようです。すでに意識はあるわけで、必要なのは地域活動をおこなう「きっかけ」であるということでした。こうした「つどい」に関わるなかで得た学びや経験を、今後の活動にもいかしていきたいと思えます。

末永 和也（日本福祉大学）

多くの方と関わり悩みながらつくりあげてきた今までの福祉教育の内容は「間違っていなかった」と実感できたつどいでもあった。これからも新しい視点とアイデアを持ち、たくさんの方と関わりながら福祉教育を考え、共生文化につなげていくことができるように実践していきたい。

鈴木 秀明（江南市社会福祉協議会）

地域の中でそれぞれの人が、自分が大事にされていると感じ、役に立っていると感じることで、自分以外の地域住民を思いやる土壌が出来るのだと、全体会の鼎談から改めて学びました。あたたかい「お互い様」の地域をつくるために、社協職員として、実践にも生かしていきたいと思えます。

竹田 奈穂子（東区社会福祉協議会）

初めて実行委員として参加させて頂きました。ちゃんとできるか不安もありましたが、実行委員の皆さん、学生スタッフさんの力を借りて自分の役割を果たすことができました。特に一緒に書籍販売をしました日本福祉大学の学生スタッフ、下村さん、中垣さん、吉岡さんにこの紙面を借りて感謝の気持ちを伝えます。また、第4分科会の参加から小さい事への気づきや、とりあえずやってみることの大事さを学ばせて頂きました。

崔 恩熙（日本福祉大学 大学院博士課程）

先日、名古屋市社協においては、「市・区社協福祉教育・福祉学習推進に向けて」をまとめて区社協に通知をしました。いまや地域共生社会の実現に向けて、社協全体が一体的になりその役割を果たしていかなければなりません。そのためには、社協職員全員がそれぞれの地域福祉実践において、福祉教育的機能を発揮していく必要があります。

中村 弘佳（名古屋市社会福祉協議会）

今年の分科会では、当事者講師のみなさんからの発信をしていただくことができ、とてもうれしく思いました。いつも学校の授業などでは感じていましたが、社協職員には出すことのできない当事者講師の力を再確認する日となりました。実行委員のみなさんのお力や、学生スタッフさんのおかげで、来年度の日本福祉教育・ボランティア学会「あいち・なごや大会」にむけて、とてもよいプレ大会となったと思います。来年もぜひがんばりましょう！

野川 すみれ（港区社会福祉協議会）

学校と地域の壁を超えて実践される豊かな協働から可能性を示唆していただきました。私は、様々な意味で当事者である「子ども」の声を届けたいという強い思いを持っていました。それを全体会にてビデオレターという形で実現できました。大塚くん、中学校の先生方、実行委員会ビデオ隊の皆様のご協力に感謝。もっと深めたい思いが強まりました。

野尻 紀恵（日本福祉大学）

次年度開催される本大会のプレとして位置づけた今回のつどいですが、短い準備期間にも関わらず内容面・運営面ともに充実したものになったと感じています。これも、毎年のつどい開催による積み上げや、それぞれの実践のブラッシュアップによるものだと思います。今回の気づきや反省も踏まえ、本大会に向けて準備を進めていきたいと思っています。

馬場 貫太郎（名古屋市社会福祉協議会）

地域共生社会の最終とりまとめで、「共生文化を創造する」という文言が述べられている。でもこのフレーズの産みの親が、私たち「あいち・なごや発」であることは誰も知らない。別に知らなくてもいい。このつどいが地域共生社会の源流であり、日本の社会を変えていく糧になっていることを密かな誇りにしようではないか。

原田 正樹（日本福祉大学）

今回はじめて実行委員として参加し、福祉への熱い思いを持った皆さまと関わることで私自身とても良い刺激となりました。また、全体会・分科会を通して、自分自身のふりかえりや、新たな気づきを得ることができました。「日常生活＝喜怒哀楽」。当事者の日常生活を伝えていくことが福祉教育には大切なことであり、そこに意義があることを学びました。今回学んだことを今後の実践に活かしていきたいと思っています。

広 真里奈（守山区社会福祉協議会）

社協職員でありながら、ボランティアとは何かと問われた時に、上手く説明できないもどかしさを感じていましたが、今回のつどいを通して様々な方からボランティア観をお聞き出来たことで、やっと自分の中で整理ができそうな気がしています。これからも自分自身のボランティア観をその時代にあったものに刷新し、醸成していけるよう、学ぶ機会を欠かしてはならないと感じました。

藤田 直美（江南市社会福祉協議会）

今回、実行委員として初めてこの「つどい」に参加させていただきました。福祉教育に対する皆さんの熱意や想いを知ることができて、自分が「障害当事者」として関わってきた福祉教育の考え方で、甘んじてはいけなのだと実感させられた。今後の糧となる、よい経験をさせてもらい感謝です。

三好 宏和（AJU自立の家）

ボランティアは主体性のもと、それぞれが地域の中で自身や仲間で行いたいこと、できることをしているわけですが、数十年と長い目でみると様々な人たちがボランティアとして関わってきたことで、その温かみが誰かに結びついて、その連鎖が地域課題に対して投げかける動きに発展し、今の社会や地域につながっているのだと感じました。これまでのボランティアを振り返り続けることが支えあう共生文化に近づいていくと感じました。

村田 敏明（名古屋市社会福祉協議会）

## 【2018 福祉教育・ボランティア学習のつどい in あいち・なごや】

### ～実行委員会委員～

原田 正樹	日本福祉大学／あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会
石黒 学	愛知県社会福祉協議会 地域福祉部長
前川 保夫	愛知県社会福祉協議会 地域福祉部
酒井 理恵	愛知県社会福祉協議会 地域福祉部
中村 弘佳	名古屋市社会福祉協議会 地域福祉推進部長
澤野 千夏	名古屋市社会福祉協議会 地域福祉推進部
村田 敏明	名古屋市社会福祉協議会 地域福祉推進部
宝達 真志	東海市社会福祉協議会
大津 裕昭	名古屋市社会福祉協議会／あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会
馬場 貫太郎	名古屋市社会福祉協議会／あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会
竹田 奈穂子	東区社会福祉協議会／あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会
野川 すみれ	港区社会福祉協議会／あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会
広 真里奈	守山区社会福祉協議会／あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会
伊藤 光洋	江南市社会福祉協議会／あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会
藤田 直美	江南市社会福祉協議会／あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会
鈴木 秀明	江南市社会福祉協議会／あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会
加藤 洋介	半田市社会福祉協議会／あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会
河村 康英	知多市社会福祉協議会／あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会
櫻井 悟	美浜町社会福祉協議会／あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会
小松 理佐子	日本福祉大学／あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会
野尻 紀恵	日本福祉大学／あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会
山本 克彦	日本福祉大学／あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会
佐藤 大介	日本福祉大学／あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会
小林 洋司	日本福祉大学／あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会

末永 和也	日本福祉大学／あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会
高村 秀史	日本福祉大学／あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会
大島 光代	名古屋学芸大学／あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会
大林 由美子	日本福祉大学／あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会
崔 恩 熙	日本福祉大学（大学院博士課程）／あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会
金 治 宏	愛知淑徳大学／あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会
後藤 康文	岐阜経済大学／あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会
鬼頭 義徳	AJU自立の家／あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会
三好 宏和	AJU自立の家／あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会
関 純 奈	地域福祉サポートちた／あいち・なごや・福祉教育ボランティア学習研究会
渡邊 保志	グマインダハウス／あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会
丹羽 俊策	アジア車いす交流センター／あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会
岡田 衣津子	名古屋医専／あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会
石塚 博幸	きららハウス／あいち・なごや福祉教育・ボランティア学習研究会

※順不同

【学生スタッフ】（順不同）

（原田ゼミナール学生）計15名

中辻 孟英	下村 優	中垣 向太	吉岡 優希	富永 晃希
佐竹 名菜	松本 有子	清水 翔太	小島 巧	西中 良樹
山田 真平	木村 優花	武澤 花音	山口 洸樹	鎌田 真央

（野尻ゼミナール学生）計15名

青木 洸介	赤塚 雄太	秋田 楓	北郷 希望	久野 佑斗
倉田 隆司	佐藤 恵里子	高橋 佑佳	高村 涼太	塚本 理沙
西田 直矢	西村 敦	牧野 誠也	三浦 華子	森下 瑞希

2018福祉教育・ボランティア学習のつどい in あいち・なごや 報告書

■発行日■

2018年4月

■編集・発行■

2018福祉教育・ボランティア学習のつどい in あいち・なごや実行委員会

■表紙イラスト制作協力■

イラストレーター 久世賀子 氏

■報告書作成協力■

日本福祉大学社会福祉学部 原田正樹ゼミナール学生、野尻ゼミナール学生